

Title	Milton とギリシャ悲劇 : Paradise Lost における 神の観念
Author(s)	森, 道子
Citation	Osaka Literary Review. 8 P.68-P.82
Issue Date	1969-06-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25758">https://doi.org/10.18910/25758</a>
DOI	10.18910/25758
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## Milton と ギリシャ 悲劇

— *Paradise Lost* における神の観念

森 道 子

*Paradise Lost* の初めに、Milton 自ら言っているように、“to justify the ways of God to men” が、彼が心を最も費し、そのために多くを犠牲にした、生涯の問題であった。彼の諸論文もこれに言及し、又、これが、*Paradise Lost*,<sup>1</sup> *Samson Agonistes*<sup>2</sup> のテーマである。Milton 自らは「神の道の正しさ」には、確固たる信仰をもっていて、同時代の、又、後代の誤り迷う人々の教育のために書く、と言っている。

Teaching over the whole book of sanctity and virtue through all the instances of example, with such delight to those especially of soft and delicious temper who will not so much as look upon Truth herself, unless they see her elegantly dressed, that whereas the paths of honesty and good life appear now rugged and difficult, though they be indeed easy and pleasant, they would then appear to all men both easy and pleasant, though they were rugged and difficult indeed. And what a benefit this would be to our youth and gentry may be soon guessed by what we know of the corruption and bane which they suck in daily ....<sup>3</sup>

同時に、Milton 自らの多難な、波乱に富んだ生涯を考えると、それら一つ一つを克服していった彼の魂の progress の吐露と言えるし、

I might perhaps leave something so written to aftertimes, as they should not willingly let it die.<sup>4</sup>

という野心もあった。

今ここで考えたいのは、*Paradise Lost* における、神と人間との問題である。Satan を神に対する人間の態度の一つの型としてみると、その Satan に対する神の道と、Adam, Eve に対する神の道とは、非常に異なるものとして描かれている。その理由として考えられるのは、神自らの言葉にある。

The first sort by their own suggestion fell,  
Self-tempted, self-deprav'd: Man falls deceiv'd  
By th' other first: Man therefore shall find grace,  
The other none:<sup>5</sup>

Satan に対して、神は“th' other none”と言い切ったように、愛も慈悲もみせない、救いを完全に shut out した、冷たい厳しい態度を示す。神は、正義とそれに基く正しい怒りと罰をもってのみ、Satan に対処し、決して憐れみに傾くことがない。この神の姿を描くに際し、又、それに反抗する Satan の姿を創るに際して、Milton は、ギリシア悲劇にみられる人間と神との対立する姿を、借用していると考えられる。Milton が、神の道を正当化するために、詩を書いたように、三大ギリシア悲劇詩人達の主題も、人間に対する神の道の正しさ、であった。Bucher や Grierson は、彼等について *Paradise Lost* の“to justify the ways of God to men”を引用している位である。Milton 自身もギリシア悲劇について、そう考えていたと思われる。散文においても、*Paradise Regained* においても、悲劇詩人達を、moral を説く賢明な人々であり、人生の師であると言っている。

Thence what the lofty grave Tragedians taught  
 In *Chorus* or *Iambic*, teachers best  
 Of moral prudence, with delight receiv'd  
 In brief sententious precepts, while they treat  
 Of fate, and chance, and change in human life,  
 High actions, and high passions best describing:<sup>6</sup>

Verity によれば、Milton は「師」ということを、とても重んじていた。

In Milton's view the great poet is a teacher in the first place,  
 a singer in the second.<sup>7</sup>

しかし、Milton はギリシア悲劇を、Chance, Fate という、古いギリシアの神々の観念から切り離してはいない。実際、ギリシア悲劇は、神の道の正しさを説きつゝも、運命の皮肉さ、矛盾、嘲弄をも歌っている。そして、それらの古い神の観念を改め、発展させ、正義の神を証明しようとしているのである。この Fate, Chance は Satan によって、*Paradise Lost* の神に適用され、頻出する。(Whether upheld by Strength or Fate.)<sup>8</sup> 又、Satan による Fall 後の Adam と Eve の言葉にもみられ、二人は神の愛をみようとしな<sup>9</sup>い。

Fate を正しい神の意志と同一視して、その存在を認めた Milton も、Chance, Necessity を神に帰することはなく、神に“Necessity and Chance/Approach not mee, and what I will is Fate.”<sup>10</sup> と言わせている。それにも拘らず、Satan や fallen angels に、Fate, Chance, Necessity を全て神と混同させているのは、ギリシア悲劇の神の観念が、そこに、意識的に導入されていることを証明していると思われる。

...since fate inevitable  
 Subdues us, and Omnipotent Decree,  
 The Victor's will,<sup>11</sup>  
 .....  
 ...when everlasting Fate shall yield  
 To fickle Chance,...<sup>12</sup>  
 .....  
 ...Fate  
 Free Virtue should enthral to Force or Chance.<sup>13</sup>

この最後の引用には、Macmillan が、次のような註をつけている。

When Brutus was about to commit suicide, he quoted two lines of Euripides, 'O unhappy virtue, you were after all mere words, and I practised thee as a reality: you it seems were enslaved to force,' or 'to chance.' Milton is evidently thinking of these two lines of his favourite Greek dramatic poet,...<sup>14</sup>

ギリシア悲劇における、神と人間との関係を、R. C. Jebb は次のようにいっている。

...the contrast between man and fate, the conflict between free will and destiny, between an absolute inward liberty and an inexorable external necessity.<sup>15</sup>

又, "the heroic in man" と "a superhuman controlling power" との相剋, と表現しているが, これは, Satan と神との関係を, よく表現している。Satan が, 神に言及する時の 'the Thunderer,' 'The Tyrant,' 'The Tyranny of Heaven,' 'The Torturer,' 'The Conqueror,'

‘Heaven’s high Arbitrator’等は、全て、ギリシア悲劇の Zeus を連想させる。例えば、‘the tyrant of Heaven’<sup>16</sup>。そして、Fate を人間にはどうにもできない絶対的なもの、と考えていて、Milton の信じているものと、異っている。*Paradise Lost* や *The Christian Doctrine* で、Milton は、神の意志とは、絶対的なものではなく、神の予知と、人間の自由意志とは、相反するものではないことを説明している。つまり、Satan の神の観念は、その自由に対する観念と同じく、誤ったものなのである。そして、そのような運命に、雄々しくも反逆し、そのような神の体制を打ち壊して、真の自由を得、自ら、神々に代って統治せんとする Satan の迷妄は、Satan の根本的罪、根本悪たる pride から来るものである。pride によって Satan は、自分が被造物であることを否定し、神に並ぶもの、否、神にまさるものとして神に抵抗し、その命令、掟を無視し、その支配下から逃れようとする。そして、それを自由と称し、自由を説き、自由の擁護者の如く振舞う。このような Satan の描写は、Satan をして、ギリシア悲劇的 hero を思い起させ、*Paradise Lost* の主人公とさせる大きな要素となっている。運命を重荷、又 yoke と感じて、それから逃れようとして戦い、ついには、それにおしひしがれる人間というのは、ギリシア悲劇の人間達の殆んど全てがそうであり、自由の庇護者として立つ姿は、Blake, Shelley 以来、Aeschylus の Prometheus として、讃美されている。

... our grand Foe,

Who now triumphs, and in th’ excess of joy  
Sole reigning holds the Tyranny of Heav’n.<sup>17</sup>

も、Ⅴ, 679—80, 他に頻出する new law(s)という考えも、Prometheus の Zeus に対する言葉を想わせる。

For new rulers lord it in heaven, and with new-fangled laws  
Zeus wieldeth arbitrary sway;<sup>18</sup>

Pride は又、ギリシア悲劇の中心問題である。三人の悲劇詩人達は、神に対する Pride を、様々に考え、扱った。神に対する人間の態度や、人間の在り方を考察する上に、Pride をその根本となる罪、悪の根源として考えた。Bucher は、次のように説明している。

...that insolence or hybris which has its root in want of reverence and want of self-knowledge, which is the expression of a self-centred will recognizing no power outside himself, and knowing no law but its own impulses.... This Insolence in the Greek tragedy is the deepest source of moral evil. It is the spirit of blind self-reliance which does not respect eternal ordinances, which seeks to overpass the bounds set for mortality and ignores the conditions of existence.<sup>19</sup>

この Pride は、キリスト教においても、罪の根源であり、St. Augustine の考えであり、正統教会の教えである。<sup>20</sup>

しかし、Milton が、ギリシア悲劇の Pride, 即ち hybris に強く印象づけられ、大きく影響を受けていたことは、ギリシア悲劇の形式に則って創った *Samson Agonistes* において、pride を中心の問題とし、その題をも、初め *Samson Hybristes* とも考えていたことから推測できる。そして *Samson Agonistes* における神に、ギリシア悲劇の Zeus が大きく影を落していることは、Parker が詳述している。<sup>21</sup> Fate という語こそ出てこないが、Parker も指摘しているように、最初に、Samson の出生に当って、天使が訪れ、お告げがあったことを語る。

(Promise was that I /Should Israel from Philistine yoke deliver.)<sup>22</sup>  
それは Oedipus の出生前の oracle と同じように、Samson につきまとい、人間には考えもつかない方法で、必ず成就される。

このような pride の権化たる Satan に対する神を描くに当り、ギリシヤ悲劇の Zeus への暗示がみられるのは当然ではないだろうか？ 勿論、Bush, Empson も言う如く、*Paradise Lost* の神は、多くの神の観念の混合物ではあるが。

Milton's poetical formula for God is ... to cut out everything between the two ends of the large body of Western thought about God,....<sup>23</sup>

ギリシヤ悲劇における Zeus は、名称は同じであっても、Homer によって描かれ、抒情詩人達に歌われた、気紛れで、嫉妬深く、人間的な、人間をもてあそぶ神々の王たるものとは、かなり異なっている。ギリシヤ悲劇の Zeus は、殆んど一神教とも言える。Zeus という名のもとに、正義と理性に基いた法をもって、宇宙と人間を支配する、絶対至高の、全能の存在であり、その Zeus の意志、掟が、運命となる。Chance や気紛れは、神にはあるはずのないものとして、justify していった。これは Zeus 信仰といわれ、Aeschylus が考察し、Sophocles に受け継がれた。<sup>24</sup> Euripides については、矛盾しない一神観をとらえることは不可能だというのが定説である。しかしギリシヤ悲劇詩人達も、神を愛とし、恩寵によって、人間の心を和げ、regeneration にまで導くというところまでは、考えが及ばなかった。Satan の考える神も、Samson の考える神も又、そうである。二人共神の愛と恩寵について、一言も言わない。

単に Satan が考えているだけでなく、Satan に対する神自らもそうである。天の高みから、Satan の計画と実行をみて、嘲笑し、更に感



わせる神は、旧約聖書にみられる考えとはいえ、ギリシア悲劇を思い起させる。<sup>27</sup> Samson についても、Parker は次のように言っている。

But in *Samson Agonistes* there is nothing said about divine 'grace.' We are told many things about the Deity, but we are not told that He is loving.<sup>28</sup>

キリスト教においても、旧約の神と新約の神とは異なり、旧約の神には、愛はなく、新約の Christ により初めて、愛がもたらされたとしばしば言われる。しかし、旧約聖書の *Hosea* には、不実の妻に例えられた罪深い人間に対し、変らぬ愛を注ぎ赦す夫たる神が歌われ、*Song of Solomon* にも恋人同志の愛によって、神と人間との愛が歌われている。又、*Isaiah, Psalms* にも、愛の神、神の人間への変らぬ愛と慈悲が頻出する。Milton 自身、*The Christian Doctrine* において、旧約と新約の神を区別することなく引用し、次のように言っている。

The Christian Doctrine is that Divine Revelation disclosed in various ages by Christ ... concerning the nature and worship of the Deity.<sup>29</sup>

*Paradise Lost* においても、Christ は、神を目に見えるものとした存在であり、天地創造の以前に、神と共に在ったものとして、描かれている。

... in him all his Father shone  
Substantially express'd, and in his face  
Divine compassion visibly appear'd,<sup>30</sup>  
.....  
Son in whose face invisible is beheld

Visibly, what by deity I am,  
 And in whose hand what by Decree I do,<sup>31</sup>

少くとも、*Paradise Lost* においては、Bush も指摘しているとおり、Milton の Arianism は殆んどみられず、正統派の三位一体説と矛盾しない神が描かれている。その、愛の化身である Christ さえも、Satan に対しては、父なる神にとりなしもせず、天国の至福から、地獄の底へつき落とすべき雷の一撃を与える。この雷は、旧約聖書の、雷を言葉として語り、雷を罰として災害の形で人間に与える Jahve の雷をではなく、Zeus の武器であり、罪の報いとして、人間を撃つ雷を連想させる。そして次の部分には、Aeschylus の *Prometheus Bound* 992—96 と *Seven Against Thebes* 427—31が暗示されている。

... so much the stronger prov'd  
 He with his Thunder: and till then who knew  
 The force of those dire Arms? yet not for those  
 Nor what the Potent Victor in his rage  
 Can else inflict, do I repent or change,  
 Though chang'd in outward luster;<sup>32</sup>

同じく罰ではあっても、Jahve の雷は、人間を直接、撃つことはない。*Paradise Lost* の神も、Adam と Eve に対する時は、Jahve を暗示する。

Eternal Father from his secret Cloud,  
 Amidst in Thunder utter'd thus his voice.<sup>33</sup>

Satan に対する Christ は、あくまでも、罰する者であり、復讐者であり、勝利者である。*Paradise Lost* III における Christ の言葉は、死の

苦しみよりも、悪と死への勝利と栄光ばかり語っていることは、Empson も指摘するとおりである。この輝かしい勝利者たる Christ の image も人間達に対する時は変る。

Man's Friend, his Mediator, his design'd  
Both Ransom and Redeemer voluntary,<sup>34</sup>

Michael は Adam に、人間の罪のため、苦しみ、悩み、嘲られ、十字架につけられて死ぬ Christ を語るなのである。

Satan 自身も、何度も言及して嘆く、至福栄光の絶頂から、悲惨と苦しみへの fall は、多くの読者の心を揺すぶってきた。

If thou beest hee; But O how fall'n! how chang'd  
From him, who in the happy Realms of Light  
Cloth'd with transcendent brightness didst outshine  
Myriads though bright:<sup>35</sup>

.....

... O fall

From what high state of bliss into what woe!<sup>36</sup>

その激しい変化、人生における盛衰、浮沈、特に、稀なる栄えから、稀れる悲惨への転落はギリシア悲劇の、特に Sophocles の、大きな中心問題の一つである。Milton も “change in human life” を、ギリシア悲劇の一特色としている。それは、Samson の身にもふりかかる。“mirror of our fickle state”<sup>37</sup> である Samson をみて、Chorus は、神とは、人間とは、一体何なのかと問う。

God of our Fathers, what is man!

That thou towards him with hand so various,  
 Or might I say contrarious,  
 Temper'st thy providence through his short course,  
 Not evenly, as thou rul'st  
 Th' Angelic orders and inferior creatures mute,  
 Irrational and brute.<sup>38</sup>

以上のように、Satan の神の観念と、pride に基く神への態度、又、神自身の姿も、*Samson Agonistes* における Samson の過去の pride と神への態度、Chorus の神の観念等と、著しく共通しているのは明らかである。

1641年の *The Reason of Church Government* で Milton は “an interpreter and relater of the best and sagest things<sup>39</sup>” となる旨を告げ、今すぐではないが、必ず、次のいずれかの形式で、life's work たる作品を書くと言っている。

...whether that epic form whereof the two poems of Homer, and those other two of Virgil and Tasso, are a diffuse, and the book of Job a brief model. ... or whether those dramatic constitutions, wherein Sophocles and Euripides reign.<sup>40</sup>

そして、その年から翌年（1641—42年）にかけて、*Samson pursofphorus* or *Hybristes*, or *Samson marriing or in Ramath Lechi*, *Dagonalia* という題の悲劇（三部作らしい）の計画があり、1642年に、太陽へ呼びかける Satan の soliloquy の一部（Ⅳ，32—39）が創られた。それには、Euripides の *Phoenissae* の巻頭（1—6）、太陽に呼びかける Iocasta の soliloquy と、Aeschylus の *Prometheus Bound* における Prometheus の太陽への独白（88—92）の影響があることは、既に多くの人々の注意しているところである。そして、その Satan の独白は、失われた楽園とい

う主題の悲劇の opening verses にと意図されていて、その *Adam un-paradiz'd* という悲劇は、ギリシア悲劇の形式に則ったもので、“a very marked resemblance to *Samson Agonistes*”<sup>41</sup>を帯びているはずであった。

このように考えると、Satan、とその神の描写に、ギリシア悲劇の神の観念が導入されていることは明らかであると思う。又、Satan と Samson、及び、それぞれに対する神の描写における多くの共通点も、それを証明していると思われる。しかしながら、ギリシア悲劇詩人達の、人生の師としての倫理的、道徳的態度を高く評価しつつも、キリスト教の神と神への態度に比べると、第二義的であり、悲観的であり、より劣るものであるという考えは、*Samson Agonistes* にはみられず、*Paradise Lost* を経て、*Paradise Regained* において、頂点に達している。*Paradise Regained* において、ギリシアとローマの栄光と輝かしい文化を讚美する Satan を、Christ に烈しく排撃させているのである。

そして、このことは、*Samson Agonistes* の創作年代に関する Parker の新しい意見によっても、一層証明されるものと思われる。*Paradise Lost* が1658年から63年にかけて、*Paradise Regained* が1665年から66年にかけて、完成されていることには異説はない。しかし、*Samson Agonistes* の創作年代については、未だに不詳であって、従来、*Paradise Lost*、*Paradise Regained* の後、1666年から70年の間に書かれた最後の作品とされていた。それに対して、Parker は、*Samson Agonistes* は “a bitter poem, a dark poem—an expression of disillusion and pessimism as regards the most of mankind”<sup>42</sup>であり、*Samson Agonistes* を創作した時の Milton は “an unhappy man, not yet possessed of the bright certainties that animate *Paradise Regained*, and the theological assurance that unifies *Paradise Lost*”<sup>43</sup>であったとあって、*Samson Agonistes* を *Paradise Lost*、*Paradise Regained* に先立つ作

品と結論している。

注

- <sup>1</sup> *Paradise Lost*, X, 643-44.
- <sup>2</sup> *Samson Agonistes*, 293-94.
- <sup>3</sup> "The Reason of Church Government: the Second Book," *John Milton: Complete Poems and Major Prose*, ed. M. Hughes (The Odyssey Press, New York, 1957), p. 670.
- <sup>4</sup> *Ibid.*, p. 668.
- <sup>5</sup> *Paradise Lost*, III, 129-32.
- <sup>6</sup> *Paradise Regained*, IV, 261-66.
- <sup>7</sup> A. W. Verity (ed.), *Milton: Paradise Lost Books IX-X*, (Cambridge, 1962), p. 79.
- <sup>8</sup> *Paradise Lost*, I, 133.
- <sup>9</sup> *Ibid.*, IX, 689-90; IX, 885, 927; X, 754-55; X, 867-68.
- <sup>10</sup> *Ibid.*, VII, 172-73; X, 43-47; V, 526-28.
- <sup>11</sup> *Ibid.*, II, 197-99; II, 393; VI, 869-70.
- <sup>12</sup> *Ibid.*, II, 232-33.
- <sup>13</sup> *Ibid.*, II, 550, 551.
- <sup>14</sup> M. Macmillan (ed.), *Paradise Lost Book II* (London, 1947), 1. 550への註。
- <sup>15</sup> R. C. Jebb, *Samson Agonistes and the Hellenic Drama*, The Proceedings of the British Academy, Vol. III.
- <sup>16</sup> Aeschylus, *Prometheus Bound*, 234, 736.
- <sup>17</sup> *Paradise Lost*, I, 122-24.
- <sup>18</sup> *Prometheus Bound*, 148-50.

- <sup>19</sup> S. H. Butcher, *Some Aspects of the Greek Genius* (London, 1916), pp. 109, 110.
- <sup>21</sup> C. S. Lewis, *A Preface to Paradise Lost* (New York, 1961), p. 66.
- <sup>21</sup> W. R. Parker, "Samson and Fate," *Milton's Debt to Greek Tragedy in Samson Agonistes* (London, 1963), pp. 211-29.
- <sup>22</sup> *Samson Agonistes*, 38, 39.
- <sup>23</sup> W. Empson, *Milton's God* (London, 1961), p. 145.
- <sup>24</sup> M. P. Nilsson, *Greek Piety* (Oxford, 1951), pp. 61, 62.
- <sup>25</sup> *Paradise Lost*, II, 190, 191; V, 735-37.
- <sup>26</sup> *Psalms*, II, 4.
- <sup>27</sup> Aeschylus, *Eumenides*, 558-65.
- <sup>28</sup> Parker, *op. cit.*, p. 240.
- <sup>29</sup> *The Works of John Milton*, Vol. XIV (Columbia Univ. Press, New York, 1933), p. 17.
- <sup>30</sup> *Paradise Lost*, 139-41.
- <sup>31</sup> *Ibid.*, VI, 681-83.
- <sup>32</sup> *Ibid.*, I, 92-97.
- <sup>33</sup> *Ibid.*, X, 31-33.
- <sup>34</sup> *Ibid.*, X, 60-61.
- <sup>35</sup> *Ibid.*, I, 84-87.
- <sup>36</sup> *Ibid.*, V, 542-43.
- <sup>37</sup> *Samson Agonistes*, 164.
- <sup>38</sup> *Ibid.*, 667-73.
- <sup>39</sup> M. Hughes, *op. cit.*, p. 668.
- <sup>40</sup> *Ibid.*, pp. 668-69.
- <sup>41</sup> A. W. Verity (ed.), *Milton: Paradise Lost Books III-IV*

(Cambridge, 1962), p. xli.

<sup>42</sup> W. R. Parker, *Milton: A Biography*, Vol. I (Oxford, 1968), p. 910.

<sup>43</sup> *loc. cit.*